

たとえばコンビニやTSUTAYAやショッピングモール。これらの複製的な消費装置が街中に増殖しつつある現在、私たちが都市空間に感じるリアリティのありようはどのように変容しつつあるのか。そのことを、抽象的な問題としてではなく、具体的な空間がもたらす感触や経験をとりあげるなかで考えること。これが本書の目的であり、そのためのキーワードが「無印都市」と「フィールドワーク」である。

同時に本書はまた、社会学のレポートや卒業論文を書こうとする大学生のために、身近な現象を「社会学する」やり方を実践的に指南するテキストとしての性格ももつ。社会学者の「模範演技」を数多く用意することで、読者となる学生が、興味ある部分をつまみ食いのように読んでうちに、知らず知らず社会学のアプローチの勘所をつかめるようになってもらえればよい。そんなねらいをもつテキストである。

1章と2章は、本書のキーワードである「無印都市」と「フィールドワーク」について解説しているので、まずはそこから読んでいただいたほうがいだろう。その他の各章やコラムは、どんな順番で読んでいただいてもかまわない。何となく吸い込まれるように立ち寄ってしまう、なんていうほうが、たぶん「無印都市」をあつかう本書には似つかわしい読み方だろう。

本書の各章では、四部構成からなる共通のフォーマットをとっている。それらは、研究がすすんでゆく大まかな流れを示しているのので、読者のみなさんが、自分でレポートや卒論をまとめるときにも、この流れが参考になるだろう。それぞれの節のタイトル部分には、特定のアイコンが登場するので、各々の意

味合いを説明しておこう。

📍でかける

まずは現場に出かけてみた、という体裁で、対象となる空間の様子や、そこでの経験や感覚を描き出す。その空間からえられる妙な高揚感、何となく惹きつけられる感じ、ふと気づくこと、戸惑い、違和感、等々。そのような身の丈の感覚の描写を入口として、社会学的な記述と分析のとっかかりを探る。

📖しらべる

対象となる空間や事象について、歴史的経緯の説明や背景知識の補足など、少し引いた視点から位置づけや文脈づけをおこなう。そのうえで、参与観察やインタビュー、新聞や雑誌記事の収集、等々、さまざまな手法を用いて、対象の分析と考察に必要な客観的なデータをそろえてゆく。

🗨️かながえる

対象となる空間や事象について、社会学的な分析と考察をおこなう。何かしらの概念を導入したり、類型化をほどこしたり、類似した事象との比較を試みたり、等々、各執筆者の持ち味を生かしたかたちで、自由に議論を展開する。

📌ふりかえる

全体のポイントをまとめると同時に、対象となる空間や事象の記述と分析から引き出される社会学的な含意を示唆する。

📌もっとかながえる

学生のためのヒント集。同じ対象について、他にもおもしろい議論が展開できそうな目のつけどころや、他のアプローチの仕方の例などを示す。

さて、前置きはこれくらいにしておこう。それではさっそく、どこにでもあがる空間を「社会学する」フィールドワークの数々に、読者のみなさんにも同行していただくことにしよう。

※なお、各章タイトルの背景に入っている写真は、それぞれの章の執筆者がフィールドワークに出かけた現場で撮影したものである。